



十月十六日、緑豊かな水前寺江津湖公園の一角に、待望の「熊本県立図書館」と、併設の「熊本近代文学館」がオープンしました。気軽に親しむをもって利用されるようにという願いが込められ、建物全体に「温知館」という愛称がつけられたそうです。

# 待望の新図書館「温知館」オープン。

## 「新熊本県立図書館」を訪ねて



BOOKS

何十年と大地に根を広げた木は美しさだけでなく、大きな建物さえ自然に同化させてしまう力をも秘めているものなのですね。温知館の横には日本庭園もあり、水と緑に覆われた付近一帯を散策するのも楽しそうです。建物内は、広々としたスペースを



ゆったりと落ち着いた雰囲気。外観も周囲の自然とみごとに調和しています。秋晴れのさわやかなある日、私はオープンして間もない温知館を訪ねてみました。まず感じたことは、鉄筋四階建ての大きな建物が実に周囲の風景とじっくり調和していることです。建物が黒っぽいモノトーンな色調だからかと思っておりましたが、それだけではありません。聞けば、建設の際、敷地内の自然の木はできるだけ切らずに工事が進められたとのこと。

持ち、おちついた色調で統一されており、ゆったりとした気分が過ごせそうです。一階には子供図書室、視聴覚室、近代文学館があります。それに眺めの素晴らしいサロンもあり、読書で疲れたらこちらで気分転換ができるようになっています。閲覧室は二階と三階にあり、特に二階の第一閲覧室は面積千平方メートルと大変な広さです。研修室は三階に三室あり、要望が強ければそれを学生の勉強室として開放することもあるそうです。いろいろと画期的なシステムが登場。閲覧できる本も二倍以上に増えました。新しい図書館の特色について、木原図書館長さんからお話を伺いました。①旧館では二十五万冊だった本の収蔵能力が百万冊まで可能になり、公



キャナリーでなぞるだけで済むようになり大変スピードアップされます。④県立図書館と市町村図書館が、図書館がファクシミリにより結ばれば、図書資料の提供など情報交換が可能になります。私を含めて熊本市以外に住む多くの人は、身近な町の図書館を利用することが多いので、できるだけ多くの市町村

図書館が、受信機を備えて、機能を充実してほしいと思います。⑤新図書館の視聴覚室では、レコードやビデオを自由に楽しめますし、L1方式による外国語学習もできます。ここにも旧図書館とは一味違った図書館を見ることができました。熊本にゆかりの作家のものを集めた「文学館」も併設されています。一階に併設されている熊本近代文学館には、熊本にゆかりの深い、徳富蘇峰、徳富蘆花、小泉八雲、夏目漱石等二十三人の原稿、著書、遺品、パネルなどが分かり易く展示されており、広く熊本の風土と文学に触れることができます。特定の作家を取り扱った文学館は多数あるけれど、郷土にゆかりのある作家を一堂に集めたものは、全国でも神奈川県と本県だけという、とてもユニークなものです。展示物の中でも漱石の「野分」の原稿は、当館の目玉ともいえるべきもので、さすがに多くの人たちがケースをのぞきこんでいました。

私もその一人ですが、肉筆の原稿を見て、「あら、夏目漱石さんもそんなに字は上手じゃなかったのね。」なんて思った途端、偉大な夏目漱石がとても身近に思えてきました。近代文学館長の光岡さんが、「文学は生きているのです。ただ遺品を並べるのではなく、訪れた人が展示物を見て、素朴な疑問なり、刺激なり、何かを感じてくれるような、そんな文学館にしようと思っています。ここで感じた何かを、訪れた人たち、特に中・高校生にとって、文学との出会いになれば幸いです。」とおっしゃられた意味が、その時本当に分かったような気がします。文学館で興味を持ち、読んでみたいと思った本がすぐに同じ建物内にある図書館で読めるというのも嬉しいですね。固苦しく考えず、気軽に訪れて、十分に楽しめる場所だと思えます。

立図書館として西日本一のスペースになったということです。②大開架方式により、旧館の二倍以上、十三万冊の本が自由に手にとりて閲覧できるようになりました。③コンピュータシステム導入で、今まで手仕事だった、貸し出しの手続きが、利用証と本のバーコードをス



ママさん特派員 今村明子さん



図書館、文学館といえは、ともすれば、とりすました印象を与えがちなものですが、今回訪れてみて、暇つぶしにふらりと寄っても一日楽しめるような図書館という印象を受けました。多くの人がこの「温知館」を訪れ、県民の幅広い文化のたまり場にして欲しいですね。

